

は子葉がないから單子葉類といふ、前者は葉の筋が網狀脈であるが後者は平行脈である。又莖幹枝などの描き方は葉に隨て案配すべきである。

(二) 花卉没骨法

梅 幹は墨又は代赭墨、花は胡粉、心點は雌黃の具、若くは花蕊に濃墨を用ゐ、これに雌黃を點ず、萼は代赭、紅梅は胭脂又は胭脂の具。

桃 枝は素直にして梅より長く、花片は梅よりも尖る、枝端に葉あり、葉は草綠に胭脂又は代赭を點じて描く。

櫻 幹は一體に淡墨にて描き、その乾かざるうちに稍淡き墨にて横に環狀を描けば墨は面白く浸む、花は胡粉に少しく胭脂を加へ、若くは花瓣の尖端より暈し、また胭脂を以てその本より暈す、萼は梅に同じく花よりも赤く、萼及び葉は代赭墨にて描き、或は葉を草綠に代赭墨を加へて描き、胭脂を差す。

椿 白椿は胡粉にて描き、赤椿は胭脂又は朱、共に芯は元白く、端黄、葉は草綠、光琳風の

ものには墨にて描き、乾かぬうちに白緑を流し込むものもある。

牡丹 疎畫の時は花を臙脂にて描き、葉を墨にて描き、蕊にまた濃墨を點ずる。密畫は花瓣の先を胡粉にて本の方に暈し、後臙脂で本より先に暈す。事梅の花の如くする。此のばかしは一度許りでなく二三次行ふのであるが下手にすると繪畫に斑が出来て極めて汚くなる。臙脂には少量の膠を加ふるがよい。蕊は胡粉にて莖を描き、端に雌黄の具葉は草綠、脈は更に濃綠、新枝の苞を代赭にし、幹を代赭墨で描く。

芍藥 一重と八重とあり、八重は中央の花瓣白く、周圍の瓣赤く、又これと反對のものもある。葉は牡丹より細長いのを常とする。

花菖蒲 花は藍又は紫、葉は草綠、密にすれば花の上に群青を施し、瓜瓣の脈に添ひ、その本に雌黄の斑點があり、葉に濃綠の脈を立てる。

燕子花 花菖蒲に似て葉長く、花の本に黄と紫色の條點を置く。

百合 山百合は花を淡墨にて描き、胡粉にて隈取りを爲し、中央の脈を本より左右に雌黄を施し、臙脂にて點を描き、苔は淡墨にて描き、頭部を代赭、若くは臙脂墨にて描く。

車百合は花を朱にて描く、葉は草綠を用ゐ、葉の間に芽として代赭の小點を加へる。

朝顔 花は白赤藍群青種々あり、蕊は胡粉、葉は草綠。

女郎花 花は胡粉にて數多の點を描き、その上に雌黄を塗り、葉並に莖は草綠に黄を加へて描く。

葛 花は臙脂の具にて小さく藤の花の如くに描き、葉は草綠に墨を加へて描く。

萩 花は具の先に臙脂をつけて藤の花の如く描き、蕾は更に色を濃くする。葉の色前に同じ。

芒 花は代赭にて描き、はげたるは胡粉、葉は草綠の墨。

菊 花は淡墨にて輪廓を描き、胡粉にて二三條の筋を入れ、更にその上に全體の胡粉をかけ、淡き草綠にて隈取りをする。黄菊赤菊も同様、前者は代赭、後者は臙脂にて隈取りをする。葉を密にする時は鈎勒法を用ゆる。

紅葉 朱又は丹、代赭の先に臙脂をつけて描き、脈と莖は臙脂墨を用ゆる。枝は淡墨。

水仙 花は淡墨にて輪廓、胡粉にて隈取り、蕊の周圍に雌黄を入れ、葉は鈎勒にして草

緑の隈取り上に白緑を加ふ。

松は幹は淡墨若くは淡墨に代赭を加へたるものにて描き、乾かざる中に鱗を描き、葉は多く墨にて筆を立て力を入れて描く、着色の時はこれに草緑を塗り、その上に白緑を以て葉を書きそへるとがある。

竹は葉も幹も鈎勒にし草緑にて塗り、その上に緑青を加へる。

草は草緑を以て多く描く。

(三) 昆虫畫法

元來此の昆虫を學ぶのは花卉の添へ物として學ぶのではなく、次に鳥類、獸類の如き動物を描く爲めに學ぶべきものであるから、本來は花卉草木の如き繪畫上の課目より分離して別に動物畫法の一料を立つべきものであるが、然し茲では從來の法に従つて花鳥畫法の中に加へて置く。

此の故に昆虫を描かんとするものは、よくその實際に就て寫生し、或は肢體動作の

草は草縁を以て多く描く。

(三) 昆蟲畫法

元來此の昆蟲を學ぶのは花卉の添へ物として學ぶのではなく、次に鳥類獸類の如き動物を描く爲めに學ぶべきものであるから、本來は花卉草木の如き繪畫上の課目より分離して、別に動物畫法の一料を立つべきものであるが、然し茲では従來の法に従つて花鳥畫法の中に加へて置く。

此の故に昆蟲を描かんとするものは、よくその實際に就て寫生し、或は肢體動作の

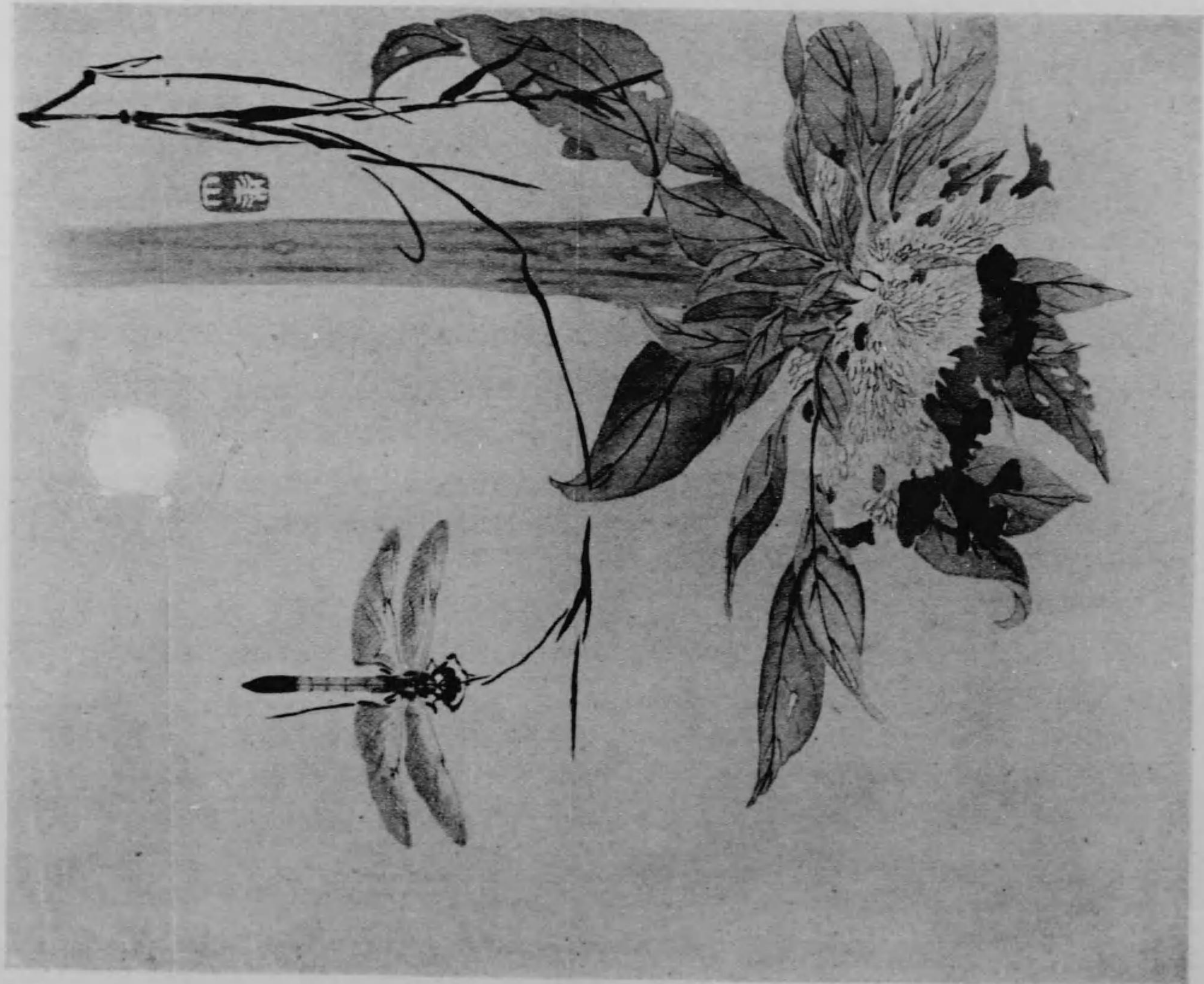


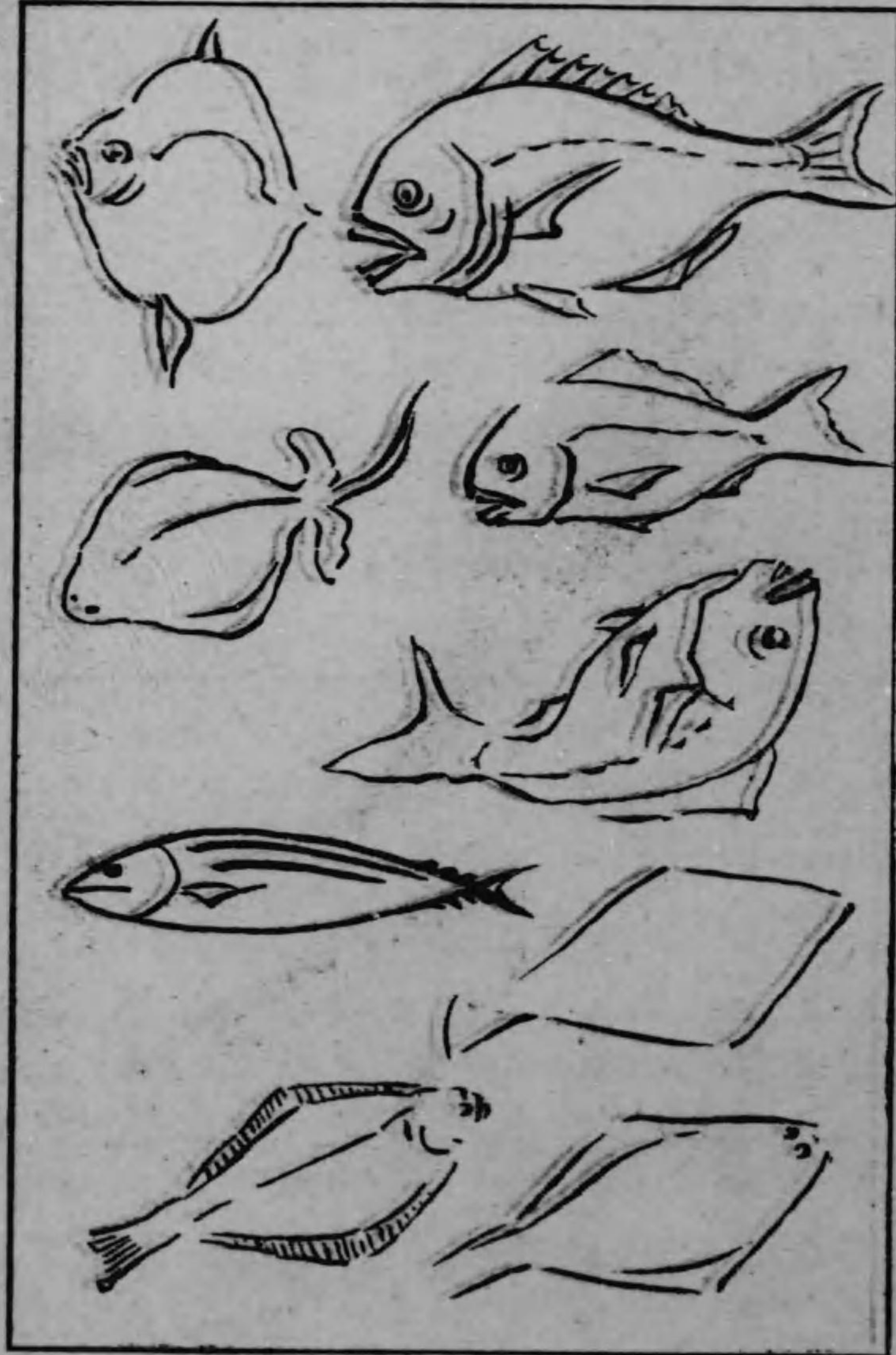
圖 蜻蛉花頭雜 筆 山 草 邊 渡

如何を知つて後に鳥類、獸類を描く時の助けとしなければならぬ。即ち動物畫は昆蟲に始まつて猛獸に終るからである。

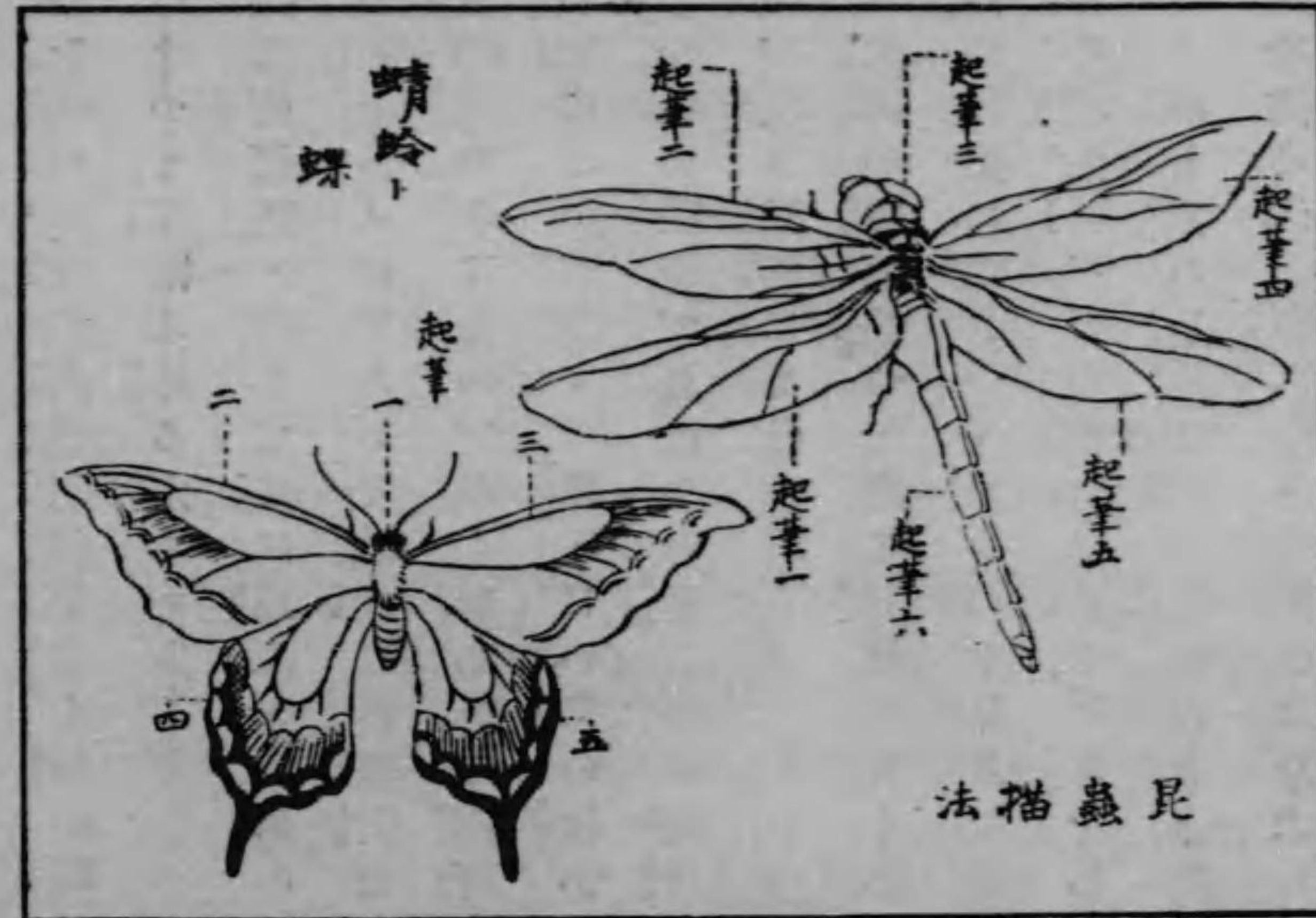
昆蟲の形體美 而して茲に昆蟲といふのは頭、胸、腹の三部より成り、羽あり、六本の足ある虫を云ふのである。元來蝶は四季共に出る昆蟲であるが、春秋に出る蝶は純白か純黄の蝶の小なものが多く、春老いて花菖蒲の咲く頃から揚羽蝶又は形の大なる黒揚羽蝶などが飛來す。即ち日の光の軟かな時分は色の淺い昆蟲が出て花もそれに應じた色に咲くが、夏の日の光の強い時分は木の葉なども黒むと同時に花も色の濃いのが咲き昆蟲にも色の濃く形の大きいのが出るのである。又藤の花の咲く時分には虻蜂の類が集つて來るが、殊に黒く大なる熊蜂のやうなものが來て長く垂れた花房の周圍に鳴きつゝ飛ぶのを見るであらう、その他牡丹芍薬、石竹、紫雲英、蒲公英、牽牛花、芙蓉などの花には種々な形をした昆蟲が來て忙がし氣に蜜を求めて飛び歩くのを見る、是等は又た自然のよき題材である。

昆蟲を描く法 頭部より翼、體脚に及ぶのであるが、草々に略筆する時は圖に示した

(甲) 法畫介魚一の圖十四第



法 蟲 昆 圖 十 四 第



日本畫の描き方

一七六

やうに形態より描き他の部分に及ぶのである。翼の大なる蝶、蜻蛉の類を描く時は翼より頭部、體脚に及ぼしてもよろしい。更に詳しく言へば、蝶の如きは翅が飛ばば身が半は露はれ、翅が立てば身は全く隠れる。首には二つの鬚(觸角)があり、嘴はこの間にある。花に来て蜜を吸ふ時は嘴が舒び、飛ぶ時は嘴が巻いてゐる。朝飛ぶ時は翅が上に向ひ、夜眠る時は翅を下にする。其他の昆蟲皆寫生より得來つて之を自然に活すべきである。

(四) 魚 介 畫 法

(乙) 法畫介魚一の圖十四第



魚介を描くには同じく寫生に依らなければならぬ、而してその順序はやはり口、頭部、背、腹、尾と描いて行くべきである。寫生の道は水族館の如きに鉛筆と手帳を携へて行くのであるが、その前に一應魚介を墨描きにする順序を學んで置かねばならぬ、死せるものに就て寫生すれば色の變化があるといふことも心得て居らねばならぬ。

(五) 翎毛畫法

昆蟲畫法で動物の肢體動作を學んだならば次に鳥を畫く、鳥を畫くには先づ嘴の上脰より筆を起し、次にそれを完成し、次には下脰を起し、眼を描く、眼は對嘴の呀口(上下の嘴の中央)の處を標準とする、次は頭を描き、又次は背の披篋毛(ミノ毛)を描き、次に翹膊(ツバサ)を畫き、再び胸を描き、並びに肚子より尾に至り、終りに腿、楮脚と指及び爪を補ふので、色彩をする時も亦此の順序とする。然し鳥の飛翔してゐる所を描く場合には翼から描く場合もある、それは圖にある姿勢のやうな場合である、鳥の肢體動作は後に獸類を描く場合に重要なものとなるのであるから、寫生は此の間に充分試

第 一 十 四 圖 鳥 翎 姿 勢 法 (文 鳥)



みて置かねばならぬ。

山禽と水禽 山禽は尾必ず長く高く飛べるやうに羽も軽い、水禽は尾が短かく、水に浮めるやうになつてゐる。尾の長い禽は嘴短かく善く鳴く、尾短かければ嘴長く善く鳴かぬ、山禽は毛羽に五色を具へ、燦として輝く如くであるが、水禽は淡白である、只鴛鴦の雌が美しい許りである、雄は野鷲と同じである。それから山禽は羽毛の色は、多く赤く、水禽の羽毛は多く蒼ひ外に猛禽の類があるが、これは羽毛の色淡墨又は赤褐色である。

小禽と猛禽 「竹に雀」 「柳に燕」といふは又た古き畫題である、これも動物と植物との共同生活から來た照應の美で、竹林には雀が寝、柳には燕が止るが、一つは季節の關係があるからである。即ち燕の來る頃は柳が芽を吹いてその薄緑の色が燕の黒い身體と照應するからである、雀は顎が黒く腹が白く背は茶褐色を帯び、黒き斑があり、嘴は硬くして圓錐形をなしてゐる。燕は顎赤く胸は柿色で腹は白く翼と尾が長い、これは雀よりも飛ぶ事に長けてゐるから、此の長い翼で、北方の寒い所から海を越え

類を食するからである、背は青黒く又淡褐色をして腹は白い、そして波のやうな斑がある、爪はまた曲つて鉤のやうになつてゐる、猛禽類の中、鷹の畫は由來日本畫で重んじられてゐるもので、肢體の部分の名稱には中々むづかしい所がある、これを覚えれば鳥の肢體の名稱はあらずし判る、然し鷹の肢體の名稱が他の鳥の肢體の名稱と同じといふことはない、たとへば鶯の篋毛とか鶏のトサカとかいふものは鷹にはない、それ等の細かい部分は茲に説き盡し難いから略して置く。

(六) 着色鳥類法

鳥類を着色法にて描くには大凡左の如くする。

雀 咽喉及び胸部は淡墨、頸は白く、中央に黒點がある、頭部及び背部は代赭墨にて描き、墨にて斑點を打ち、嘴及び足を墨にて描く。

頬白 雀に似て頬を白くし、頸より胸淡墨、頭部墨背に赭墨を用ゐて描く。

燕 頭背、翼尾ともに濃墨、尾長く二つに別れ、翼の風切又長し、喉部胸部淡墨、頰頰及び

尾の付根の上に代赭を塗る。

鶯 頭、背翼、尾ともに淡き草綠。

文鳥 全體の色は灰色、頭部は黒色、嘴太くして淡紅色を帯び、足は淡黄色。

雲雀 頭に少し毛冠あり、背頭部、翼代赭、墨腹は同色の淡きものにして全身に稍淡き墨にて斑點を置く。

千鳥 前額及び頬白く、頭背に藍墨を用ゐ、胸部に淡墨、嘴及び足は代赭に淡き朱を加ふ、嘴淡き朱。

郭公 頭部背部は藍墨に程淡き墨の斑、腹部は代赭に墨の斑、足は前趾二、後趾二で、赭黄色をしてゐる。

鳩 家鳩と土鳩とあり、色にも白きもの、藍鼠のもの、代赭色のもの、群青、綠青色のものなどがある、嘴及び足に臙脂又は淡き朱を用ゆる。

雉子 彩色が稍複雑する、雄の眼の周囲の赤き部分は朱を用ゐ、後ち臙脂にて細き點を施し、頭頸、腹は墨を用ゐ、その上に少し綠青をかける、頭に毛冠があり、背は代赭に稍

淡墨にて斑を描き、肩は淡き藍色、翼は代赭墨を用ゐ、腰に草綠及び臙脂を以て細毛を描き、尾は代赭色に墨の斑點、雌は全部代赭色で腹を白くし、代赭の斑點を置く。

鶏 も鳩と同様一様でない、褐色のもの、白きもの、黒きもの、様々に着色し、翼及び尾に群青、綠青を用ゐ、鶏冠は朱にて描き、臙脂を差し、嘴と足とは雌黄である。

鴨 雄は頭部及び頸を墨にて描き、その上に綠青を加へ、背には藍墨を置き、翼は上の一二が白く、その他は墨を用ゆる、また綠青、群青を加へる事もある、尾は白く、その上部に黒き毛を畫き、胸は暗紫色で、腹は淡き代赭の上に細き條點がある、雌は全身代赭で描き、腹に斑點を置く。

雁 頬及び背部翼とも凡て代赭墨を用ゐ、腹は中央白く、兩側代赭にして横の斑條を淡墨にて描き、嘴及び是を代赭とする、足には水掻きがある。

鶯 頭に毛冠があり、背に篋毛があり、淡墨にて輪廓を描き、胡粉を施し、五位鶯は頭部背部翼を藍墨にて描き、足は黄色にて描く、前者の嘴及び足も同様、赭黄を用ゐる。

鶴 鶴の羽翼は淡墨にて輪廓を描き、胡粉を塗る、尾の上を覆ふ翼は濃墨、頂に朱を入

日本畫の描き方
れ、嘴は老綠色に足は淡墨とする。

(七) 獸類畫法

獸類には牛馬羊猫犬など種々あつて、その細を説くことは困難である、要は同じく寫生より得來らねばならぬ、猫、虎、獅子、豹などは猫科の動物であつて熱帯に居り、それ故猫は寒がる、犬、狐、狸、狼などは犬科の動物で寒地に多い、それ故犬は夏困難する、故に是等の動物を描く時も、配合する植物に注意して寒地の狼に熱帯の家屋植物などを配さぬやうにしなければならぬ。又之れ等のものを描くには寫生の外、故人の粉本に依て學ぶも宜しい。

動物の寫生 凡そ寫生の中、その眞を寫すといふ點からは獸類ほと困難なものはない、肖像畫は言はず、人物もその形態動作のみを寫すならば、敢て困難を感せず、花卉の如きに至つては又ことに易々たる業である、而も此の獸類に至つてはよくその眞を寫すといふことは困難である、猫、犬、馬の如き多く見馴れたものは又寫し易いが、兎、獅



渡邊華山筆猛虎圖

法畫物動 圖三十四第

第十章
花鳥畫法



子、豹、猿の如きものに至ては二三十回の練習で直ちに其の眞を得るといふことは至難である。然らば今この寫生を善くし得るかといふに、前に述べたやうに、それは馬、犬、猫の如き多く見なれた動物を數回も十數回も寫生して、その骨格動作を會得した上に始めて虎、獅子の如き猛獸を寫生すべきである。それ即ち易より難に就くの法である。此の法を棄て、始めから虎、獅子の如き猛獸を寫生しても到底そは成功せぬ。換言すればその寫生が到底虎たり獅子たり得ぬ、それといふも運筆といふことが一つは意識の表現に外ならぬから、多くその状態を意識せぬ虎、獅子の如き動作がいかにな筆を運らすも實物に似ぬ所以で、寫生とは意を寫すの理また此所に現はるのである。



藏家賀須蜂（ふ傳と筆光吉佐土）起縁音觀兒稚

は意識の表現に外ならぬから多くその状態を意識せぬ虎獅子の如き動作かいか
筆を運らすも實物に似ぬ所以で寫生とは意を寫すの理また此所に現はるゝのであ
る。

第十一章 人物畫法

人物畫といふ事 人物畫は前に説いたやうに、我國には佛敎畫歴史畫風俗畫(浮世繪)と區別されてある、佛敎畫の古大家には僧曇徴を始め、秦造河勝、阿佐など云ふものがある、又祥啓派の祥啓明兆派の明兆、如雪、周文などいふ名手妙手も佛敎の名畫を成した、次に土佐派は主として宮中若くは上流社會の風俗を畫いて一派をなし、光起以後に至つて其の派から市井の風俗を寫す者が起つて、茲に所謂浮世繪の一派をなした。歴史畫はやはり土佐派の畫く所で古來その妙手に乏しくない、降つて現今に於ては、是等の古流を汲む者の外に、新樣式の人物畫を描くものが澤山にある。故に今これを學ばんとするにはその如何なる描法に依つて起手の第一筆を起すべきか、先づその判斷に苦しむ譯である、若し予輩が土佐派なれば土佐の描き方を教へ、浮世繪風なれば浮世繪の描き方を教ゆるが、予輩はその流派でないのみならず、各派の樣式なるものは、元來固定せる繪畫上の法則ではなく、その表顯は各畫家の心的態度に依つて定ま

るのであるから、主觀的に言へば自然の制式に反しない限りは如何様にもこれを説いて宜い譯である。即ち流派などは一切之れを無視して宜いわけである、故に初學者にあつてはその門に上るの階段としてそれ／＼好む所の流派に従つてよろしい、只一言すべきは人物畫の妙を成さんとするには第一が寫生、第二が臨畫、第三が傳神、第四が作圖、第五が修養であるから初學者は常に古畫の研究をなすと同時に人物の寫生を怠つてはならぬ、

世態の觀察 眼を世上に注いで時代の嗜好、風俗の變遷並にその歴史的關係と自然的關係とを觀或は歴史の書を繙いて、題材をその中に發見することを努むべきである。人物畫の描法に就て根本に溯ればそれは支那の畫法である。而も支那の法は人相學、骨相學などいふものを土臺とし、その人相學も天地五行說などに負ふ所が多いから、今日では當籤らない許りでなく、それ等の豫備智識を今日の畫家が備へるとは不必要である、故に予輩はその宜しきを取て、一般的の描法を簡單に説くこととした、頼む所は各人の工夫如何にある。

製作楷模 人物畫に於ける製作楷模なるものは如何先づ宋の郭若虛が著した「圖畫見聞志」の中に製作楷模なるものがある、その中にかう云つてゐる。「凡そ圖畫の風力氣韻は固に畫者當人に在る、その種々の描法規矩の如きは察するがよい、人物を畫くには必ず貴賤と氣貌と朝代の衣冠とを分つべきものである、釋門僧侶には善巧方便の顔がある、道像には修真度世の範を具へてゐる、帝王には上聖天日の表を崇とばなければならぬ、外夷には華を慕ひ欽み順ふの情を得させなければならぬ、儒賢には忠信禮義の風を見はし、武士には勇悍英烈の貌を多からしめ、隱逸には肥遯高世の節を識らしめ、貴叔には紛華侈靡の容を尙ぶ、天帝(神)には威福嚴重の儀を明らかにし、鬼神には醜詭馳蹇の狀を作り、士女は秀色姪媚の態に宜しく、田家は醇朴野の眞がある、衣紋を畫くには筆を用ゐること全く書に類する、衣紋に重大にして調暢なるものがある、續細にして勁健なるものがある、勾るも綽かなるも、縦まゝなるも、製るも、理に叶ひ安りに筆を下すことがない、以て高きも側ちたるも、深きも斜なるも、卷きたるも、摺みたるも、飄るも、擧るも、皆その勢ひを狀るべきである」——而して人物を畫か

んとするには徒らに形ちのみを執らずして精神を得るに努めなければならず、皆その人その性によりて描寫の區別を爲さなければならぬ故にその精神の一事を傳ふるにのみに力を注いだのでは十全の効を擧ぐる事は出来ぬ今その神を發する便法としては、精神を傳ふる外衣冠環珮の形狀並に景物等に細心の注意をなし、その誤を顯はさるることに努むるの要がある。

體軀規準 凡そ人物を寫さんとするには體軀の大小肥瘦があるのは勿論である、支那畫法にも西洋畫法にも一定の規準と云ふものがある、即ち日本畫にあつては、立七坐三といつて大凡左の如くである。

- 一、頭部の長さの七倍が肩より足の平に至るまでの全身長(カッタ西洋畫にあつては九倍以下西洋畫にあつては孰れも二を加ふ)
- 二、兩手を左右に開きたる長さは頭部の六倍。(西洋畫は八倍以下此の如くす)
- 三、手を下げたる長さは頭部の三倍(腰に至る)
- 四、肩より臀部に至る頭部の三倍。

五、坐したる時の身長は頭部の三倍(頭部より計れば四)

六、掌を開きて拇指より中指に至る長さは顔面の長さに等し。

七、掌の大きさは顔面の三分の二でその長さは足の平の長さの三分の二。

八、顔面を四等分せる真中の線は眼と耳。

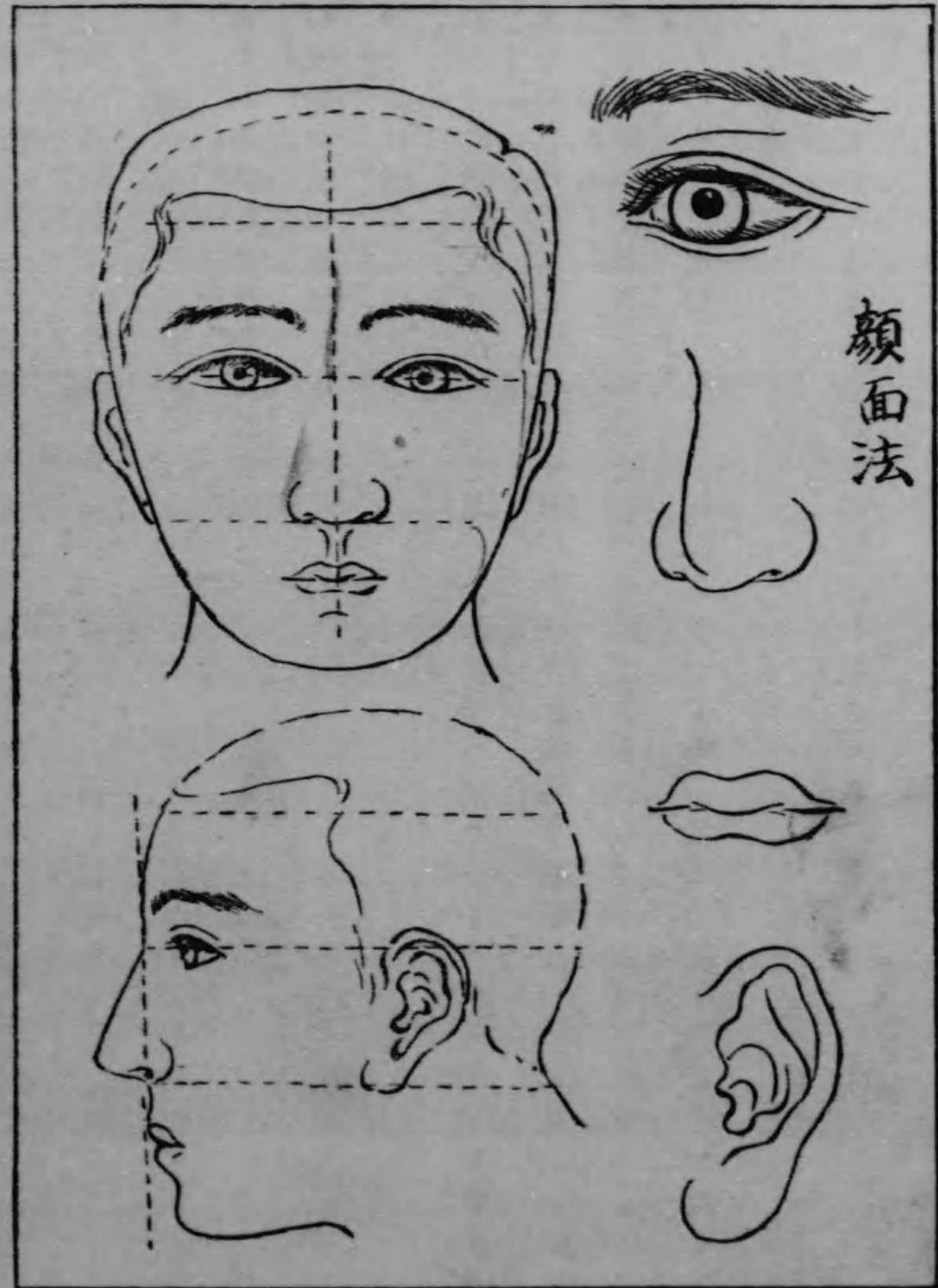
九、右の三分の三の線は鼻下。

十、口の大きさは眼の大きさに等し。

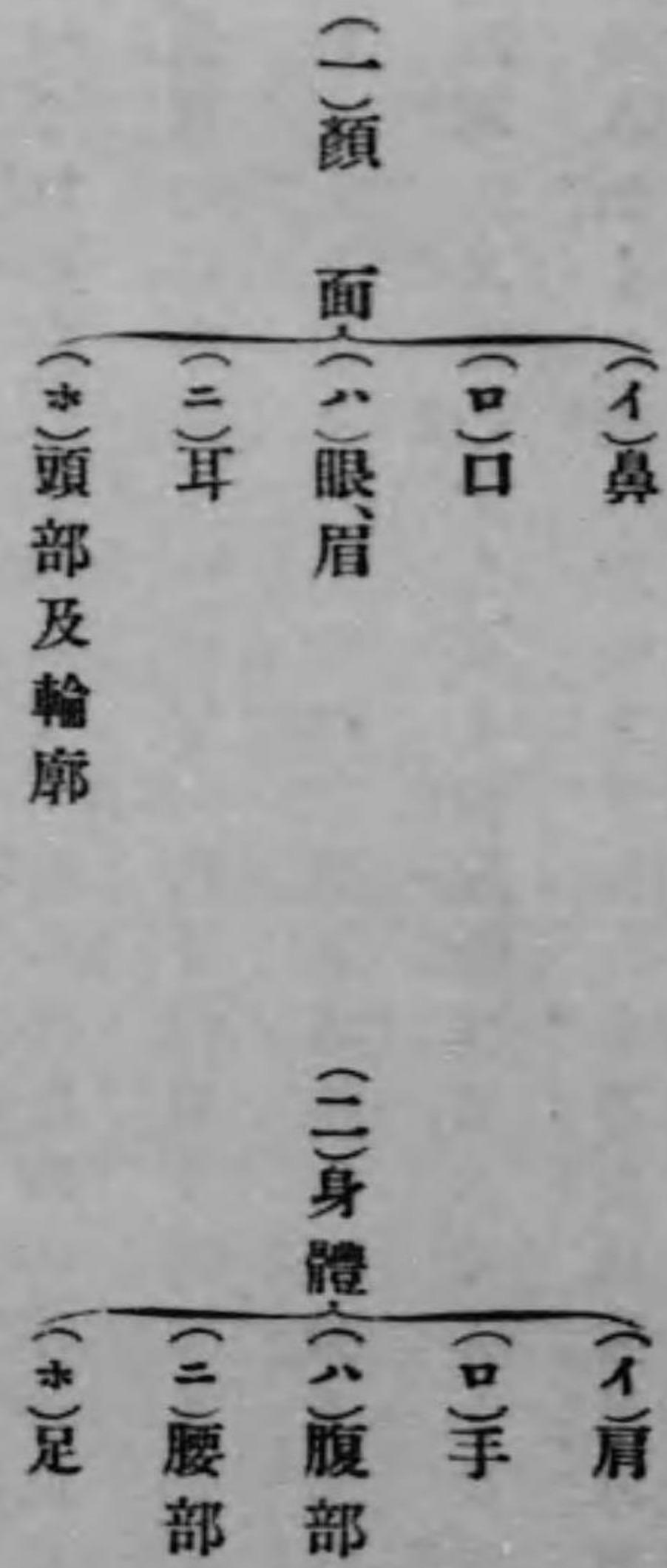
これは男子の身長を凡そ六尺と見た舊來の法で従て女子には頭部の五倍半乃至六倍が全身長となつてゐる、然し今日では女子の身長すら五尺以上のものが多いのであるから男子は七倍乃至八倍としなければならぬやうである、然し全然九倍にすると西洋人のやうになつて見づらいから畫くものに依つて七倍半位に手加減するが好いやうである。

倍今これを畫かんとするには、左の順序に依る

法面顔物人 圖四十四第



顔面法



相貌の描き方 相貌の描き方を一ト通り述べれば第一に

(イ)鼻 鼻は高聳にして豊隆ならんことを要する、小鼻の怒りたるは悪、小鼻の開きたるは愚、小鼻の狭きは貧、鼻頭の尖りたるは悪、圓きは卑しき相である故に鼻は高からず、低からず、鼻梁通りて歪まず、小鼻も肉豊かに鼻孔が現はれず、又反らず折れず豊隆に畫くべきである。

(ロ)眼 眼は所謂鳳眼に畫く、鳳凰といふ鳥の眼の如くするのである、特に眼中の點睛は畫の死活を來す重要なものであるから、極めて鄭重にしなければならぬ、人物の精粹玄奥は唯此の一點睛に由るのであるから決して忽せにしてはならぬ。顧愷之

人物を畫いて數年眼睛を入れぬことがあつた、人其の故を問へば形貌の善惡は妙處關ることがなくとも、眼睛の入れやう悪しき時は、總類(凡て類れる)となる。故に、尤も氣分よき時を待つて眼睛を點すと答へたといふことである。禽獸蟲魚の點睛も同様である、而して之れを畫くには先づ眼睛の圈をうち、然して後濃墨を用ゐて精を施すのである。總て神明佛陀、その他天帝靈物の點睛は、視念眼と稱へて自らの心を觀るの思ひを偶し、決して他を瞋るが如くならしめず、眼の中心に點すべきである、龍の如きも亦同じである。

(ハ)口 口には凡そ三通りある、寬仁の口は相法に四海と稱へ又四の字口と唱へて、結べる口の一の字形になり、唇の格好四の字の如く豐隆なものは是れ一、次は魚口と稱へ、魚類の口の如く、へゝの字形に下に低りたるものこれ二、次は顰口と稱へ、唇の上にVの如く上りたるものこれ三である、四海口最も貴相で賢士高士はこれを置く。

(ニ)耳 一取は色美しく、輪廓揃ひてふくよかに垂珠、即ち耳たぶ圓く肉づきて笑を含める如くに垂れたのを宜しとする、要は雍壯厚重に畫くべきである。

(ホ)眉 眉また豊かに各々その人に依て或は昇り或は垂れ、或は反り或は立つことを要するが、而もその筆を下す際にはその根の内に入るゝの意あらんことを要する。而して眉間即ち印堂は廣く豊かに眉と眉との間狭からず廣からざるやうに畫く、廣きは痴、狭は急、また眉毛の薄いのは孤獨の相であるから、男子壯年は凡て濃く太く畫くべきである、但佛道の眉毛太く、賢者の眉毛は細い。

(ヘ)鬚髯 これまた二三の法がある、即ち短長或は頬に生ずる物の如き是である。

(ト)頬、顴額 頬は豐隆にして骨の露はれぬやうに置く、骨の立つたのは惡相にあらざれば貧相である、顴また豐厚で細く迫つたのは薄相である、然し角張れるは惡相であるから、賢士逸人には用ゐない、額も亦豐厚で日角月角(左右の骨)の程よく立ちて、板に流れざるやうに置く。

肢體法 手足などを描くには普通親指から描き始めるが、便宜上他の輪廓から描き始めてもよい、その大さは掌を真直に開いた大さが顔面の三分の二で兩掌である、と略々顔を掩はれ、握り掌は顔面の四分の一である。足は掌の大さに三を掛けたもの



肢體法

で二つの足の平面の大きさは顔と等しい以上肢體の動作は常に自己の手足其の他又は他人の手足その他をモデルとして寫生しつゝ學ぶべきである。

彩色法 是等の人物を彩色にて描くには先づ顔及び手足は始め淡墨にて輪廓を描き一體に淡き代赭にて塗り同じく代赭にて隈取りを爲し最後に肉線を同じく代赭にて畫きその上をまた墨にて描くそれを括と云つて一體に描く法と重なる部分だけ墨描きにする法とある。

女を畫くには代赭の代りに淡き胡粉にて塗り朱の上淡にて隈取りをなし淡墨若くば朱その儘で括りをする。

顔の線も以上の如くし口は淡き朱にて塗り女は臙脂にて隈取りをする眼は上の線を太く下の線を細く眼睛は代赭墨を用ゐる瞳には艶墨にて指す眉及び髪は始め具墨にて描きそのち艶墨にて毛書きをする耳は男も淡き朱にて線を描きその上に括りをする。

衣紋法 宋の郭若虚が云つてゐるやうに人物畫に於ける衣紋を畫くのは筆を用ゆ

ること全く書を書くやうにするのである。衣紋に重大にして調暢なるものがあり、細にして勁健なるものがあり、公るも、綽かなるも、縦まゝなるも、掣るも、必らず理に叶ふべきことである。彼の支那に於ける人物畫の大家と云はるゝ顧愷之の描法は春の蠶の絲を吐き出すが如くである。また春雲の天空に浮び流水の地上を流れ行くが如くである。また曹忠達の衣紋は人の水中より出づる如くにしてしほれ、吳道子が衣紋は人の風中に立つが如く衣帯吹かれ飄るさまであつたといふ。故に人は呼んで曹衣出水、吳帶當風と云つてゐる。

人物の衣紋を畫くには凡そ十八の法がある。故にこれを十八描法と稱してゐる。然しまたこれに一描を加へて十九描としてゐる人もある。今その種名を示せば次の通りである。

- 一、高古遊絲描 最も古法、文人人家多くこれを宗とする。尖筆を用ゐて所謂曹衣の如くする。衣褶は蒼老緊牢なるを要する。(第四十六圖参照)
- 二、琴絃線 古法の一、琴糸の亂れて絶たざる如き描法である。正鋒直しき線は寛除

(一)法紋衣物人 圖六十四第



なるを要する。(第四十七圖參照)

三、鐵線描 此れ又古法の一、張叔厚、張渥、元代の人の草創にかゝる、我が土佐畫の人物は多くこの法を用ゆる、鐵線の如く堅硬な描法をいふ、正鋒(直しき線)は長く點は縷する如く石面に錐する如くする、書に於ては階書である。(第四十七圖參照)

四、行雲流水描 此れ又古法の一、雲の銷然として溪を出る如く、水紋の曲流して風に向ふが如き描法である、正鋒(線)は雄豪で而して鍊筆を要する、李龍眠の衣紋はこれである、以上の四法は文人、家多くこれを宗とする。(第四十七圖參照)

五、馬蝗描 正鋒に尖筆を用ゐる筆を圭用になし、馬蝗の繋がる如くにする。

六、釘頭鼠尾描 北宋の武洞清これを用以、吳道子に學ぶ、佛像羅漢を作る、正鋒(線)を釘頭にして起し、細筆を以て鼠尾を爲すのである。(第四十七圖參照)

七、混描 淡墨を以て衣をなし、濃墨を以てその皴を作るのである。

八、撇頭釘描 秃筆を用ゐて釘の頭の如くに畫く筆を下せば疾きこと、奔馬の如くする。(第四十六圖參照)

(二)法紋衣物人 圖七十四第



九、曹衣描 尖筆を用ひ衣褶を重疊しまた緊罕して蚯蚓描の如くする。(第四十六圖参照)

十、蚯蚓描 正鋒直しき線(せん)のうちに引いて骨を戦め尾は怒つて降らぬやうに描く。

十一、棗核描 吳道元の草創、尖筆を用ひて藏鋒をなし、筆頭を止めて棗核の如く描く。

十二、橄欖描 明の顔暉その他の多く用ゐたるもの、大なる尖筆を用ひ、擊納筆の返り(かへり)を橄欖の如くする筆が鼠尾描となるのは忌まねばならぬ。(第四十六圖参照)

十三、折蘆描 宋の梁楷が用ゐたるもので、減筆の極に達す細長なる尖筆を用ひて、太く筆頭を納め、その人物を畫くや、首面肘腕は細筆を用ひ、衣紋を粗く畫く。

十四、柳葉描 吳道元の蒼意で筆を下す時は釘頂になるのを避け、上下相意じて柳葉の如くする。

十五、竹葉描 筆を横臥して肥短なる線を描き、擊納筆の返り(かへり)を竹葉の如くする。

十六、戰筆水紋描 正鋒であるが筆を下して鋒を藏するを要する、疾きこと一擺の波の如くする。(第四十七圖参照)

十七、枯柴描 又柴筆描といふ、銳筆を用ひ、横臥して大減筆をなすのである。

十八、減筆描 馬遠、梁楷の用ゐたるもの、折蘆描の別に減筆せるもので、筆を弄する、と彈丸の如くする。

十九、蘭葉描 古法に白描なるものがある、鐵線描と蘭葉描とは即ちこれである、吳道子の法であつて、また馬遠が多く用ゐたものである。

衣紋彩色法 衣服を着色するに三種の塗り方がある、一は平塗と云ひ、衣紋の上をも構はずして一體にこれを塗るを云ひ、一を彫塗と云ひ、衣紋の皺を一々よけて塗るを云ひ、一を退塗と云ひ、衣紋の皺の際を少し退きて塗るをいふのである、衣服の模様を描く時は歴史畫なれば、故實を調べ、風俗畫なれば、時好の色彩模様を見て描くのである、その時は一々必らず下繪を作り線密にこれを彩色すべきである。

描き方の終りに

日本畫の描き方はこれで大體を終つた、これからは或は實際の寫生に或は作畫に、或は師の教養に刻苦して藝術の奧義に達しなければならぬ。然して其の道たるや

却々筆舌の以て盡し得る處でないから、眞に繪畫の道に進まんとするものは、良師を選んでこれに就き、多年の修鍊を積み重ねなければならぬ。本書に説き來つた畫道の如きは實に繪畫の道に入るの初歩で、これに依て繪畫の大成を期せんとする如きことあらば却て諸賢の失望となる。而も繪畫の道は反覆修鍊に依て始めて得來るのであるから、本書に依て飽かず之をなす時はまた其の道を會得される、要は諸賢の之を用ゆると用ゐざるとにある。

日本畫の描き方終

大正九年九月一日印刷
大正九年九月八日發行

日本畫の描き方奥付
定價金貳圓五十錢

不許
複製

發行所

東京神保町

日進

振替東京一九二三三番
電話本局一四二五番



校訂者 荒木十畝
著者 西澤 笛 畝
發行者 東京市神田區南神保町十四番地 鶴岡五郎
印刷者 東京市京橋區日吉町十番地 渡邊 爲 藏

民友社印刷部

新刊發賣

高村眞夫畫伯著

西洋畫の描き方

菊版脊クロス美装
三色版畫手本數葉入
定價 一圓八十錢
送料 十二錢

眞の研究を土産とし無限の滋養の溢るしまゝに著されたる本書は先づ西洋畫の藝術的價値あり
始め研究の準備研究方法及び練習法を飽迄懇切に飽迄簡明に濃威を以て説かれたる出色の良書

丸山晚霞畫伯著

新日本畫の描き方

菊版脊クロス上製
三色版畫手本數葉入
定價 二圓五十錢
送料 十二錢

日本畫の崇高なるに西洋畫の華美を加味して成れる本書を見よ其の華美と其繪術と其崇嚴とは
正に日本畫に新機軸を造れるもの今先生多くの研究家をして新日本畫の眞體を會得せしめんと
して本書を著す豈し近來稀に見る快著也

380
b

終